
silence mirage ~ 天空の導き人 ~

る ~ し ~ 1 2 世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

silence mirage ～天空の導き人～

【コード】

N8760X

【作者名】

る〜し〜12世

【あらすじ】

タイトル通り、silence mirageの続編です。

1 (前書き)

前作品、silence
mirageを読んだからここの作品
を読んだ方がいいかも。

僕は今、電車に揺られながら流れていく緑の景色を眺めている。

今まで滅多に乗ることのなかった特急電車の、向かい合った4人座席。

その窓際に僕は座っている。隣には3人分の荷物。

僕の向かいには友人二人が座っているが、どちらも揃って眠りに
ついていた。

僕の真向かいに座っているのが入江直之。

クールな性格の口数の少ない少年で、彼とは中学の時から付き
合いだ。

ショートカットでさらさらした黒髪を持つ眼鏡少年で、今は黒の
ワイシャツに薄手のグレーのカーディガンを羽織り、下はジーパン
というラフな恰好をしている。

直之の隣にくろだ たけるいるのが黒田武。

こちらは直之とは正反対で、誰にでも気さくに振る舞う活発な友
人だ。

セミロングの茶髪が印象的で、僕らの中では一番背が高く、17
5センチある。それでいて細身なため、当事者曰く、後ろから女性
に見間違えられることがよくあったらしい。

顔立ちもよく、俗に言うイケメンというやつだ。

こちらも中学時代からの友人であるが、彼と一週間以上付き合いが続いた女子は未だ見たことがない。

武は度が過ぎる程のゲーマーで、女子と一緒にいる時もついゲームの方に目がいつてしまったり、話題がゲームのことになったりして、愛想を尽かされるといのが毎度のパターンとなっているようだ。

黒のタンクトップにデニム地のハーフパンツという恰好で、この電車に乗るまでに、すれ違う女性の視線を何度か集めていた。

そして僕の名前は城崎^{つねはら}春^{はる}。

半袖の水色のTシャツに灰色のカーゴパンツという出で立ちで、本日の小旅行に出向いている。

身長は3人の中では僕が一番低い。

直之と武はぐっすり眠っていて当分起きる気配はない。

みんなそれぞれ早朝に家を発ったからだ。

僕も眠気はあるけど、我慢できないというほどではない。

窓に薄らと反射した僕の顔は、無造作に伸ばした黒髪の下で瞼を重たそうに瞳が支えている、ちょっと間の抜けた顔になっていた。

季節は夏、8月の初旬で高校の夏休み真っ只中である。

と、今しがた電車はトンネルに入り、僕は慌てて視線を逸らした。

トンネルは短かったらしく、程なくして太陽光が車内に射した。

山岳の中を走っているの、窓は再び落葉樹の広がる森を映し出している。

電車に乗ってからかれこれ1時間が経過しようとしていた。

落葉樹が広げる緑を窓から暫く眺めていると、またトンネルに入った。

僕は決められたようにまた目を逸らす。

どうしてそんなことをするかって？ あるものが見えてしまうのだ。

・・・幽霊である。

きっかけは去年の冬。

僕はある少女に出会った。彼女がもうこの世の者でないということを知らずにだ。

彼女とはたった三日間しかいられなかった。

それ以降一度も会ってはいない。

いや、会うことはないだろうし、もう会ってはいけないのだろう。だから、今までに、もう一度会いたい、という気持ちを抱くこと

はなかった。

そしておそらく、彼女との出会いが、不可解な存在が見えるようになったきっかけなのだろう。

再びトンネルを抜けたのか、車内に射す太陽光の温度を感じたので、僕は外に目を向けた。

どうやら、ようやく山岳を抜けたのか、窓の外には清々しい青空と、空に浮かぶ太陽の光を受けて煌めく海が広がっていた。

海岸線は弓のように内側に湾曲していて、窓からは海沿いを右にカーブしながら伸びるレールが見えた。

そんな景色に見とれていたから僕は気を抜いていた。

「うげっ!？」

僕は瞬く間に顔をひきつらせた。

見えたのである。

海面に立つように浮いていた黒い人影を。

水場には多くの霊が集まるということをすっかり忘れていた僕は、これから行く場所が海水浴場だということを出し、溜息とともに肩を落としたのだった。

駅に着くと、改札を抜けて出口をくぐり、バスロータリーを抜けて徒歩5分程のところに、僕らが宿泊する旅館があった。

3階建てのその旅館は、海水浴場に背中を向けるようにして建っていた。

旅館の入り口は、古風な建物を思わせる重みのあるつくりで、いかにも値が張りそうな雰囲気には僕は少し後ずさりしそうになった。

この旅館は、実は直之の両親の友人が経営していて、直之の両親が話をつけてくれたお陰で、今回僕たちは特別に値引きという計らいをしてもらっている。

だから、本来ならこんな高そうな旅館には泊まることはない。

入り口の自動ドアをくぐり、フロントで鍵をもらうと、向かったのは最上階である3階の部屋。

扉を開けると、そこは畳10畳の広さのある和室だった。

ここでは二泊お世話になる予定だ。

数カ月後に待ち構えている進学に向けての受験勉強の息抜きにと計画された二泊三日の小旅行。

言い出したのは武だった。それを聞いた直之が動いてくれたので、この小旅行が実現した。

部屋に入るなり、皆一様に荷物を畳に下ろした。

部屋の真ん中には高級感のある漆塗りらしきテーブルがあり、その周りを座椅子が4つ囲んであった。そしてテーブルの上には茶櫃ちゃびつ

があり、そこに急須と茶筒、湯飲みが三つ置いてあった。

壁際には小さな液晶テレビ、その隣にある腰ほどの高さの小さな冷蔵庫の扉には『冷蔵庫の中にミネラルウォーターが冷えています。ご自由にどうぞ！』というシールが貼ってあった。

親切なホテルだこと。

部屋の奥には広縁ひろえんがあり、荷物を下ろして身軽となった僕たちは自然とそこに寄り集まっていた。

広縁にある窓からは、旅館裏側にある砂浜が見下ろせるのは当然のことながら、遠くの水平線を一望することもでき、沖の方を漂っているタンカー船らしき影まで見つけることができた。

まさに絶景である。

時刻は午前11時前。

砂浜は海水浴客でいっぱいだ。そのほとんどは家族連れやカップルと言っている。

砂浜にはカラフルなビーチパラソルがうちつけられ、色鮮やかなビーチシートで埋め尽くされていた。また、等間隔で監視台が設置されていて、監視員が目を光らせている。

旅館の近くにある海の家では、水着にエプロン姿の女性がウエイトレスをやっている、僕はつい見惚れそうになった。

もちろん、前述した通り、海で遊ぶ計画もしている。

しかし、僕はまた見てしまったのだ。

砂浜を滑るように不自然に移動する人影。

海面に立ち、動こうとしない人影。

そして一番はつとさせられたのが、旅館の袂からじつとこちらを

睨んでいる不気味な女性の影だ。

「ひっ!?!」

面食らった僕は慌てて半回転して海から目を逸らすと、室内にはなにもいないことを確認してほっとため息をついた。

「海の家の子、むっちゃかわいくね?」

「そっだな」

と、武の問いかけに返答する直之の声が背後から聞こえてきた。しかし、一人だけ反対側を向いている僕に気づいたのか、

「大丈夫か?　なんか顔色悪いぞ?」

武が前に回り込んで僕の顔を覗き込んできた。

「ああ・うん。ちょっと体調おかしくなってきたから、今日はこゝで留守番してゐよ」

「ここまで来といてもつたいねえな」。まあ、明日もあるから今日一日で完治させなよ」

「あ・ああ」

そうして二人は早速海に出かけ、僕は一人ここに残ることになった。

静かになった室内で、靴に入れていた、読み始めて間もない推理小説を手にとると、畳に寝ころんでしおりの挟んだページを開く。

そのページのフレーズが目がとまり、ふと僕はその言葉を呟いた。

「汝、夜歩くなかれ・・・か」

>

正午過ぎに武から連絡があり、昼食を海の家でとろうと誘われたのだが、断りを入れ、僕はそのまま小説を読み続けた。

読むことに没頭し、気づけばいつの間にもやら時刻は午後3時前。空腹を告げる腹の虫を静かにさせようと僕はホテルから出ることにした。

来る時に見つけていた、駅前ロータリー沿いにあるコンビニで、

弁当を買ってホテルに戻るといふ段取りで向かったのだが、そこで気になることが二点あった。

一つは、コンビニへと向かう道中で聞こえた噂話だ。

三組のカップルの団体が僕の泊まっているホテルの方角へと向かっていて、僕がすれ違った時にそれは聞こえてきた。

「ねえねえ？ 今日の夜さ？ 師走の旅館に行ってみない？」

「あ？ 確かこの近くにあるっていう有名なお化け屋敷のことか？」

僕はぞっとした。

幽霊が見えるという身ゆえ、そんな場所に近づきたくもなかった。

ただ、師走の旅館という名前だけは頭の隅に記憶しておいた。

もう一つはコンビニの中でだ。

店の中にいる時、ずっと視線を感じていた。というより凝視されていた。

相手は幽霊ではなく、人間だ。

しかも意外なことに僕と同年くらいの子。でも知らない子だった。

ウェーブのかかった茶髪セミロングの少女。

背は僕より低くて、透明感のある真白な肌に、同じく真っ白なワンピースドレスを着ていた。

見ず知らずの子からなぜこつも凝視されるのかわからないが、こちらも女の子の方へ振り返ると彼女はわざとらしくぷいっとそっぽを向いた。

でも、気にせず弁当を選んでいるとまた凝視される。

接触してくる気配はない。

恨みや憐れみをこめた視線というものではなく、ただ普通に見られているだけ。

気にせずにコンビニを出たが、彼女が追ってくる気配はなかったので、深く考えずにホテルまで帰ってきたわけである。

そしてコンビニ弁当を完食すると、食後の満足感から僕は眠気に襲われ、夕方戻ってきた直之と武に起こされるまで眠りについてしまったのだった。

夕方、友人二人が戻ってくると前述した通り熟睡していた僕は起こされた。といっても、部屋はオートロック式で鍵は僕が持っていたから携帯電話の着信音で目が覚めたのだが。

旅館内一階にあるレストランにて三人で夕食をとり、大浴場にて風呂を済ませて、三人一様に浴衣姿で宿泊部屋に戻ってきたのが夜8時半過ぎ。

部屋に上がると布団は既に敷かれていた。

布団の上でくつろいでいる僕と直之だったが、武はというと、自分のカバンを引き寄せて中をぐそぐそとあさっていた。やがて、

「じゃあ、これからお楽しみタイム！」

と、ハイテンションで両手で掲げたのは、ゲーム機だった。

早速室内にある液晶テレビにゲーム機をつなげ始める武に、僕だけじゃなく直之までもが呆れ顔だ。

武が持つてきていたのは、四人までプレイできる、相手を場外に吹っ飛ばして負かすことで有名な格闘ゲームだった。

「ただやるだけじゃつまんねえ。バツゲームアリだ。異論は許さん」

無論、僕も直之も異議を申し出たが断言通り却下された。

そして初戦で真っ先に敗北したのは僕。

「バツゲームの内容はこのアミダクジで決める」

そう言って武は一枚の紙をテーブルに置いた。

どうやら彼の言うアミダクジのようだ。事前に作っていたらしい。何もかもが準備万端整っていて計画通りことが進んでいるようである。

「一から十の中で適当な数字を言ってくれ」

「ちょっとストップ」

と、横槍を入れたのは直之だ。

「その方法は武にとって有利だろ？」

言われてみればその通りだ。

このアミダクジをつくったのは武本人、数字の中に入ってるバツゲームを全て把握していると言っている。

それに数字の中に一番楽なバツゲームを入れていけば、もし武自身を負ければそれを選べばいいことになる。

「そうだな。なら俺が負けた時はこうしよう。二人が数字を言い合って、それを足した数字のバツを受ける。もちろん『0』もありだ。そうすれば俺は『1』のバツだって受けることになる。あとは足して二桁になったなら、十の位を省いて一桁目の数字のバツを受ける。これでどうだ？」

直之は無言のまま首肯した。

「さあ、仕切りなおした」

「じゃあ、二番」

僕が億劫そうに呟くと、武は二番の数字の割り当てられたアミダ

クジを辿っていく。

やがて彼は、にやっと不気味に微笑んだ。

「よし、じゃあ一発目のバツは、一階の売店で夜分の食糧を調達して来てもらおうか」

というわけで、二人から五百円ずつ託された僕はなくなく一人部屋を出たのである。

一階の売店に着くと、陳列棚から適当にスナック菓子とジュースのペットボトルを選び出してカゴに入れ、レジで支払いを済ませる。

ため息をつきながら売店を出た時、僕の視界にある人物の姿が映り込んだ。

コンビニで凝視してきた例の女の子だ。

彼女は数十メートル程離れた通路の突き当たりだったので、僕がいることに気づいてないようだ。

奇遇にも泊まっていた旅館が同じだったようで、遠目で鮮明には見えないが、彼女もこの浴衣を着ていた。

やがて彼女は通路の角を曲がって見えなくなったので、僕は気にせずに部屋へと戻った。

そして、ジュースとお菓子をテーブルの上に広げながらの二回戦が開始された。

それから直之、武、直之、僕、とバツゲームが進行していく。

テーブルの上にぽつんと置かれた、なんのジュースを混ぜたのかもはや不明な、飲みかけの液体の入った湯のみに、ゲーム中ずつと正座させられて悶えている武、両の頬にシップ（なぜ持ってきてるのか？）を貼られた直之。

そして僕の頬には狐のようなヒゲの落書きが黒マッキーで入っている。ちよっ、まずいだろ、これは！

そして、6戦目に敗北を喫したのは直之だった。

「五番だ」

して、アミダクジの結果は、

「ナンパ・・・？」

アミダクジを見下ろしていた僕は、そこに書いてある通りのことを呟いた。

「ほっ」

と、反応の薄い直之はいつも通りの無機質な表情。

「なら、これには一つ条件をつけさせてもらおう。今の時間は午後1時を少し回ったところ、ナンパしようにも人を見つuckerのは困難かもしれない」

「ああ、そういえばそだな」

「だからここから一階までを往復して一人みつけられなかった場合はバツゲームはなしにしてもらおう」

「まあ、いいだろう」

直之の的確な物言いに言い包められたようで、武はあっさり納得した。

そして僕は部屋を出た。

ちなみに直之の両頬に貼っていたシップは、そのままナンパするのは酷だということで既に剥がしてある。

「よし、じゃあバツゲーム二回戦いってみよう」

午後11時を過ぎているためか、通路の中は、先ほど売店に向かった時とは違い、薄いオレンジ色の補助灯と緑の非常灯だけで照らされていて不気味な薄暗さだった。

だから武の開始宣言も囁き声だ。

人気は全くない。

階段を下りて一階につくも、やはり誰もいなかった。

先程の売店は横網状のシャッターが閉まっていた。フロント、レストランにも同じくシャッターが閉まっていた。エントランスホールにも人気はない。

柱を背にしてある、アンティークを思わせる振り子時計は午後1時15分を指していた。

「やれやれ、このバツゲームは無意味だったな」

武が悄然と肩を竦める。

しかし、とある通路の角を曲がろうとしたところで会話が聞こえてきたのである。

僕たちはなぜか反射的に慌てて引っ込んだ。
聞こえてきた声は二人分、どちらも女性の声だった。

「バツゲームスタートだ」

武はにかつと微笑むと、直之の耳元で囁いた。

「さ、行ってきなよ」

「ああ」

一瞬の躊躇いもなく、直之は角を曲がっていく。
その後ろで、僕と武は壁に張り付くと耳をそばだてた。

そして直之の声が聞こえてきた。

「突然ですいませんが、よければ明日、僕と一緒に行動しませんか？」

その瞬間、女性の会話はピタッとやみ、辺りは静寂に包まれた。数秒後、一人の女性の声が聞こえてきた。

「それはつまり、私たちをナンパしてるのかしら？」

「その通りです」

直之が即答すると、再び静寂が辺りを包み込む。

だが、やがて、

「……いいわ。こっちは三人、あなたたちも三人でちょうどいいもの」

一人がそう返答したが、僕の身体は突如硬直した。

隠れてるのに、どうしてこっちの人数を知られたのか？

僕ははっとして背後を見やった。

そこにあったのは、外が闇夜のために鏡と化していた窓。

窓には直之の後ろ姿と女性二人の姿がくつきり映っているのではな

いか。つまりそれは、向こうからもこちらが丸見えということだ。

「そういえばさっき『このバツゲームは無意味だったな』って聞こえたんだけど。これって、彼が今私らにやってるナンパがバツゲームだという認識でいいのかしら？」

もしかして、彼女さんたち、怒っていらっしやる？

隣で武は苦笑いを浮かべていた。

「後ろの二人出てきなさい！」

怒声にもとれる声色だったので、僕はまた凍りついてしまう。

「仕方ない。行くぜ」

ぼんつと僕の肩を叩いた武は潔く角から出ていった。

なんでこんな目に……。

僕も落胆しながら、角から足を踏み出していった。

曲がり角を曲がった先にある、薄暗い通路に明かりを放つ自販機の前に、直之と女性二人の姿があった。

女性二人の背丈はどちらも武と同じくらい、170センチ以上はあるだろう長身だ。

年齢は僕たちより3つほど上だろう。二十歳くらいに見える。

二人とも薄いピンク地に濃いピンクの花柄模様の入った浴衣姿で、一人は茶髪のサイドポニー、もう一人は腰まで伸ばした黒髪のロングヘア、目鼻立ちも整っていて、どちらも美女といっても過言じゃないくらいの容姿だった。

「で・でけえ」

どこ見てんだてめえ！

僕は反射的に武に肘内した。

そうは言っても、気を抜けば僕もすっかり見そうになる。女性の浴衣の胸元から覗く、透明感のある白い胸の谷間を。どちらの女性も、俗に言う巨乳の持ち主だった。

「やっぱり・・・怒ってます?」

おそろおそろ僕は尋ねた。

「バツゲームの名目でナンパされて怒らないやつがいると思う?」

茶髪サイドポニーが鋭く尖った目つきで僕の顔を覗きこんできた。かと思うと、なぜかくすくすと笑われてしまった。

「じゃあ、私たちからの罰として、明日から奴隷になってもらいましょうか」

「いい考えだわ。馬車馬のように使ってやりましょうよ」

女性二人は世間話でもするかのように物騒な会話を僕らの前でかわしている。

僕と武は顔を見合わせた。

直之はこちらを振り返っているが、相変わらずの無表情だった。

「じゃあ明日の9時にエントランスで待ち合わせよ」

段々と厄介な展開になってきたために、開いた口が塞がらない。

「わ・わかったよ」

僕の隣で、武は悔しそうに返事した。

「あ、そうそう。今鍵持ってるでしょう？ ちょっと見せてくれる？」

黒髪に促され、不思議そうに武が鍵を手渡そうとしたところで……

ん？ 鍵……？ やばい！ 渡しちゃダメだ！

しかし、もう遅かったようだ。

「部屋番号は暗記したわ。これではつくれようものなら、この支配人に部屋番号伝えて、この人たちに襲われそうになったって言うから」

凍りつく武を尻目に、僕は茫然自失に陥っていた。

「じゃあまた明日ね」

黒髪の女性が背を向けて去っていく。

「子ギツネちゃん、おやすみ」

と言い置いて、茶髪サイドポニーの女性も続いて去っていった。

「……子ギツネちゃん？」

はっとして僕は自分の片頬を擦った。

「ヒゲだ……」

今になって自分の頬にヒゲの落書きがあることを思い出したのだ。
った。

それから僕たちは部屋に戻ったけど、みんなもはやゲームどころ

の心境じゃなかった。

時刻は12時前、室内は既に真っ暗にされている。

ちなみに部屋に着くと同時に石鹸で念入りに洗ったので、僕の顔にはもうヒゲは残っていない。

テーブルの上では、飲みかけのジュースと封を開けたままのスナック菓子が散らかったままである。

「なんか、どつと疲れたな」

「ああ」

布団に座り込んだ武と直之。

武はもとより、直之までもが屈託した面持ちをしていた。

僕も無言のまま茫然としていて、無気力状態になっていた。

「もう寝ようか？」

「ああ」

二人は布団の中に潜っていったので、僕も二人につられて布団の中へと潜り込んだ。

ちょうどその時、昼間に読んでいた推理小説の1フレーズが頭をかすめたのである。

「汝、夜歩くなかれ。はは、あはははは・・・」

僕は呆れて笑いが込み上げてきた。

そつだ。夜中に出歩くのはやっぱりろくなことがない。

「きもい笑い方すんな!」

「う、ごめん」

隣から武が怒声をあげたので僕はおとなしく閉口したのだった。

>

深夜、僕は目を覚ました。

友人二人は眠りの最中のようで、武からは歯ぎしりまじりのイビキが聞こえていた。

時間は2時過ぎという、あまり起きたくない時間だった。

寝る時はいざこざによる疲労感があったせいかすぐに眠りについたけど、いかんせん、昼寝をとりすぎたらしい。

起きたと同時に尿意を催した僕は、室内にあるトイレで用を済ませて戻ってくると、突然妙な感覚におそわれた。

なぜか外が気になったのだ。

二人が寝ている布団を避けながら広縁におそるおそる近づき、窓を覗くと、月明かりを反射した海、さざ波の音がここまで聞こえてきそうな風景が眼前に広がった。

「あれ？」

そして違和感を感じた僕。

どういうわけか、不思議と幽霊は見えなかったのだ。

しばらく窓の向こう側を眺めていると、段々と予期していなかった衝動におそわれた。

「・・・外、出てみようか」

テーブルの上にあった鍵を掴むと、浴衣のまま僕は部屋を出て、一階へとおりていく。

オレンジ色の補助灯だけがフロアを照らす中、僕が旅館の自動ドアの前に立つと、音もなくそれは動いた。

この旅館はどうやら夜間でも外出できるらしい。

ホテルや旅館は夜間でも外出可能なところが多いらしいが、その代わり、機械や従業員が出入りをチェックしているという。

しかし海水浴場方面である裏出入口は横網状のシャッターで閉まっていたため、正面出入口から建物の周りを一周して砂浜に向かった。

ちょっとした解放感から、僕は気分よく砂浜をそぞろ歩きしていた。

夜中の澄んだ空気が心地いい。

星空も綺麗で、月が一層輝いて見える。

明日のことは今は忘れよう。霊害のないこの瞬間を楽しもう。そう自分に暗示をかけ、夜空と海の構図に心奪われていると、

「汝、夜歩くなかれ」

心臓を貫かれたように僕は凍りついた。

「ある推理小説の1フレーズだよ。もしかして眠れないのかい？」

それは偶然にも、僕が読んでいた小説と同じものだった。

気配なんて感じなかった。

まるで瞬間移動でもして接近してきたかのよう。

背後から現れたのは少年だった。

僕よりも背は低く、ほっそりとした女性のような身体つき、僕と同年代くらいに見えるが、青いスポーツキャップを目深にかぶっているので、少し表情は読み取りにくい。

淡色のマドラスチェック柄の半袖シャツに濃いグレーのハーフパンツという恰好だ。

「あ・ああ、少し気分転換にと」

「そっか。ちょっと一緒にしていいかい？」

「え？ うん」

頷くと、少年はにかつと微笑み、僕の隣に並んだ。

表情は読み取りにくいだが、おっとりした口調から穏やかな人柄な
んだろうと思った。

「僕はともかく、君はなぜここに？」

「俺も眠れなくてね。あと、俺のことはトウヤと呼んでくれ。冬の
夜と書いて冬夜だ」

「僕は春と書いてはじめだ」

「へえー、偶然だね。俺は冬で君は春か。夏と秋はいないのか？」

夏と言われて頭をかすめたのは、僕が幽霊を見るきっかけとなっ
た、幽霊少女の名前だ。

彼女の名前は、夏の姫と書いて夏姫なつひめと言う。夏姫と出会ったのは、
名前と正反対の冬だったが。

「どうかしたか？」

「いや、ちょっと昔を思い出してね。夏の字が入る女の子のことを思い出してた」

「今、昔って言ったけど、その子は今は君の近くにはいないってことかい？」

「・・・そだな。遠いところに行っちゃった」

「そっか」

何かを悟ったようで、冬夜はそれより深くは聞いてこなかった。

その後、冬夜からここに来た理由を尋ねられたので、単純に男三人で勉強疲れからリフレッシュするための小旅行としてここへ訪れたと答えた。

冬夜は、ここには家族旅行で来たという。
小さい頃にもここに来たことがあるらしく、今回で二度目だそうだ。

「ところで、一つ君に言っておきたいことがあるんだ」

突然、冬夜は意味深な口調で切り出した。

「師走の館って名前、聞いたことある？」

コンビニに行った時に、カップルのグループが話題にしていたお化け屋敷の名を、僕は頭の隅から瞬時に引っぱりだした。

「あ・ああ。噂くらいなら」

「なら話が早い」

温厚だと思っていた少年は突然スポーツキャップのつばをあげ、僕に険しい面持ちを見せつけた。

「そこに近づいてはならない。絶対に近づくな」

「・・・わかった」

僕は深く考えたりせず、少年の謎めいた忠告をあつさり承諾した。幽霊がこの世に存在していることは百も承知。なにせこの眼で今まで見てきているのだから。

廃墟どうこうよりも、昼間の海にも近づきたくはなかったわけで、そんな忠告は僕には必要のないものだ。

「じゃあ俺はそろそろ戻るよ。君も早く寝て、日中の時間を楽しんだほうがいい。せっかくの旅行なんだからね」

「そうだな。もう少ししたら戻るとするよ」

冬夜は、じゃあ、と手を振って砂浜から去っていった。

僕は再び夜空を見上げた。

「師走の館・・・か」

冬夜はここに来たのは二度目だと言っていた。

地元民ではない彼でも噂を知っているということは、相当有名なお化け屋敷のようだ。

彼の忠告通り、近づかないのが身のためだと思った。

>

深夜の砂浜を後にし、旅館に戻って持っていた鍵で宿泊部屋の扉を開けると、部屋の奥から光が漏れてきて、薄暗さに慣れていた僕の目を眩ませた。

なぜ明かりが・・・？

足を進めていくと、

「よお、春！」

これには絶句した。

武も直之も、さっきのようになまたテレビゲームをしていたのだ。
時刻は午前3時前である。

「どこ行ってたんだ？」

画面から目を離すことなく武が訊いてきた。

「寝れないからちよっと外を散歩してた」

「そっか」

「僕、もう寝るよ」

「なんだ、つれないな」。やらないのかよ？」

「ああ」

答えながら自分の布団へと移動すると、テレビ画面とにらめっこしながら直之が、おやすみと呟いた。

「ははは・・・明日は地獄が待っている。いい夢見るよ」

「はいよ」

自棄にもとれる笑い声を上げる武に返事し、布団の中に潜り込むと僕は目を瞑ったのだった。

翌朝、午前6時過ぎに僕は目を覚ました。

軽快なBGMが夢のなかに流れ込んできたからだ。テレビもゲーム機も電源が入れっぱなしだった。

「・・・つたく、寝落ちするまでゲームし続けるなんて」

ため息混じりに両方の電源を落とすと、広縁に歩み寄ってみる。ほんの少しだけ窓を押し開けてみた。といってもやはり安全のために全開はできないようだ。

深夜から早朝にかけての空気は澄んでて清々しい。

微かな風も吹いていて、寝ぼけ眼の僕の頬をやんわりとかすめていった。

「昨晚、いや、既に今日だったが、砂浜で幽霊を見ることはなかった。」

しかし、陽が差すと影の住人は活動するようだ。

波打ち際に軍服姿の男性の影があった。

早起きだな。もとい、活動時間が逆だろ？

もしかすると、近くにあるという廃墟『師走の館』のせいなのだろうか？

それはさておきだ。

実は言つと昨日から僕は変な違和感を感じていた。その違和感の根本がちょうど今しがたわかった。

昨日の女性二人組とのちよつとした騒動の時だ。

こっちの人数がばれた時、どちらの女性が言ったのかはわからないが、こう言ったのだ。

『こっちは三人、あなたたちも三人でちょうどいいもの』

そう。あそこにいたのは女性二人だけ。彼女たちにはあと一人連れがいるということになる。

こんなことに気づいたところで、先の奴隷イベントが回避できるわけではないので、嘆息をつくしかないのだが。

そして時は流れて午前8時前。

その頃には武も直之も目覚めていたが、どちらも寝不足の影響で目の下に隈ができていた。

聞くところによれば、4時過ぎまでゲームをやっていたらしい。

それから僕たち三人は一樣に身支度し、昨日夕食をとった館内にあるレストランにて簡単に朝食を済ませると、時刻は約束の9時を後5分程でまわる頃。

待ち合わせ場所であるエントランスに着くと、そこには既に昨夜の女性二人が待っていた。

だが、三人目の姿はなかった。

僕の両隣には、仏頂面の武と無機的な面持ちの直之が立ち尽くしている。

「来たわね」

「感心感心」

女性二人はどちらも水着姿だった。

黒髪はオレンジのビキニに水色チェック柄の薄手のパーカーを、茶髪サイドポニーはディープグリーンのワンピース水着に白一色の薄手のパーカーを羽織っていた。

しかし、どうあがいても二組の大きな胸に目がいつてしまう。

「じゃあ、今から水着に着替えてきてもらいましょうか？」

「・・・え？」

黒髪が腰に両手をあててそう言つと、武はポカンとしながら疑問符を口からもらした。

そう。今の僕たちはみんな私服姿だった。

「ほら！ さつさと着替える。海行くわよ」

「え？ 今日一日奴隷だつて・・・」

「確かに奴隷だつて言ったけど、そんな手酷く扱つたりしないわよ。せつかく遊びに来てるんでしょ？ なら互いに楽しまなきゃ」

武と黒髪の応酬に、茶髪サイドポニーが割つて入り、そう説明するが、

「はあ・・・」

まだ武は状況が飲み込めてないらしい。

それよりどういうことだ？ なんか素敵イベントになってないか？

「じゃあ、とりあえず自己紹介。そちらから」

茶髪サイドポニーに促されて僕たち三人は順番に名乗っていった。

「私は南条 美月。衣澄大学の一年」

黒髪の女性が僕らに続いて自己紹介し、

「私は神原 麗奈。同じく衣澄大学の一年よ。そしてあと一人は私の妹。もうすぐくるはずなんだけど」

と、茶髪サイドポニーが自己紹介と、僕にとっては三人目の正体についてのヒントを与えてくれた。

昨日は暗くてよく見えなかったが、神原 麗奈さんという方は、昨日コンビで僕を凝視してきた少女に顔立ちがよく似ていたのだ。

あれ・・・？ そんなことより、このままの流れだと、僕は海に行くことになるんじゃないか・・・。

今朝波打ち際にいた軍服姿の男の影が頭を過る。

どうにかして海に出ることは回避しなくては。

「ごめん。二人で楽しむできなよ。僕、まだちょっと体調悪いから」

武と直之に断りを入れたたちょうどその時である。

「ああ!！」

と、唐突に上がった声に、僕は面食らった。

声を上げたのは、階段のある方向からやってきた少女である。

少女はかけてくると黒髪と茶髪サイドポニーの間に割って入った。

「どうしたの美織^{みおじ}? いきなり大声あげて」

茶髪サイドポニーが目を丸くして言った。

「驚いたのは僕も同じだ。」

予想通り、昨日コンビニで凝視してきた例の彼女だったからだ。

「うっん、なんでもない」

と、かぶりをふって誤魔化す少女。

自惚れかもしれないが、多分、僕の姿を見て驚いたのだと思う。

「この子が今言った妹の美織よ」

美織という少女は、先述したように、ウェーブの入った茶髪のセミロングに、姉の麗奈さんとよく似た端麗な顔立ちで、小柄で細く華奢な体躯だった。

女性二人と同様に、既に水着を着ていた。ツーピースのレモン色の水着で、胸元にはリボンがついている。その上に薄緑のカーデイガンを羽織っていた。

容姿は姉にひけをとらないかもしれないが、胸のサイズは小ぶりだった。

「姉さん？ 今日一日この人たちが奴隷になるんだよね？」

「え？ まあ、そうだけど」

「じゃあ、この人いただき！」

と、例の少女はいきなり僕の腕を掴むと、砂浜のある裏出口の方へ駆け出した。

「ちよっ・ちよっと・・・!?!?」

引つ張られながら後ろを振り返ると、残された四人が呆気にとられた顔で僕を見送っていた。

燦々と照りつける太陽の光を浴びながら、僕は見知らぬ少女に腕を掴まれて走っていた。

波打ち際付近では既に海水浴客がちらほらいて、僕はそれを横目に見ながらも今前を走っている少女の顔を過去にも見ていなかったか思い出そうとしていた。

しばらく引つ張られ続けた後に、彼女が足を止めたのは、トイレと思われる小さな建物の隣にある、狭い雑木林のようなちよつとした茂みの中だった。

旅館からは百メートルほど離れていたため、付近にあまり人気はなかった。

「ちよつと……いったいなんなの？」

肩で息をしながら僕は彼女に尋ねてみた。

しかし、彼女は僕に背中を向けたままで何も答えない。

だからもう一度、今度は問い詰めるように尋ねた。

「君、昨日も僕を見てたよね？ 君は僕を知ってるみたいだけど、失礼だけど僕は君を知らない。君はいったい誰なの？」

振り返った少女は、意表をつかれたようにポカンとしていた。

「・・・そっか。それもそうね。私少し変わっちゃったから」

小首を傾げて頬に指を当てていた少女はなにか合点がいったようで、気を取り直したように訊いてきた。

「さつき姉さんが紹介してくれたけど、もう一度自己紹介、私は神原 美織。あなたの名前は？」

人違いかどうかは置いといて、僕の顔には見覚えはある。でも名前までは知らないということが。

「僕は城崎 春」

「じゃあ、早速だけど少しイメージして。黒髪のおかっぱ頭の私を。それで何か思い出せない？」

言われたように彼女・・・もとい、神原さんのいう姿を想像してみる。しかし、それでもわからない。

「・・・ごめん。やっぱり人違いだよ」

神原さんは残念そうに嘆息をついた。

申し訳ない気持ちになっていたのも束の間、神原さんは突然口火を切った。

「一年前、あなたしんかい森海線の電車の中でトイレ我慢してたでしょ？」

「ええ！？ あ・うん、そんなこともあったような気がする」

「気がするじゃなくて、ホントにあったの。で、降りる駅のトイレに近い出口に行こうとして電車の中移動してたでしょ？」

「あ・ああ、そんなことしたと思う」

「その扉の近くに、今言った姿の私が立っていたの」

「え？ そうだったの？ 全然気づかなかった」

「……なんか腹が立つわね」

神原さんはぶくつと頬を膨らませた。

「仕方ないよ。多分我慢してて周りが見えてなかったんだよ」

さて、僕が通学で使っている電車の名前が出てきたということは、これで人違いではなく、僕と彼女は過去にすれ違っていたということになる。

しかし、ただすれ違っただけで、ごく平凡な一少年である僕を記憶に留めてくれるわけがない。

きつとその時に僕はなにかをやらかしたはずだ。

そう。例えば信じたくもないが、

「……もしかして僕、堪えきれずに……漏らした？」

「してない!」

ためらいがちにそう尋ねた僕に、顔を赤らめながら彼女は即答した。

そりゃそうだ。僕にも電車の中で漏らした記憶はないのだから。

じゃあなぜ僕が目についたのか、ますますもってわからない。

「助けてくれたのよ。その・・・痴漢から・・・」

ためらいがちに少女はぽつりと口にした。

「痴漢・・・？」

言われてみると、痴漢もいたような気がしないわけでもない。

「あなた、電車の中でこう怒鳴ったのよ。『邪魔だ！ どけ！』ってね。そして痴漢の手を払ってくれたの」

その瞬間、僕の頭の中に一瞬だけ映像が流れた。

「ああ！ そういえば、おっさんと女子高生がくっついてて邪魔だったから、ついカーっとなって何か叫んだ気がする」

「ちょうどそこで電車が駅に停まって、あなたは全速力で降りてった。痴漢はあなたの一声で気づいてくれた周りの人に捕まえられて駅員に渡された」

「・・・まじ？」

「こんなこと嘘ついてなんになるのよ」

「で・でも、こんなところで会うなんて奇遇だね」

取り繕うかのように僕は言ったが、声は上擦ってしまっていた。

「そうね。こんなところで会うのは奇遇ね。でも私、そのことがあってから毎日あなたと同じ車両に乗って通学してただけど・・・気づかなかった？」

「・・・いや、全然」

その返答を聞いた神原さんは呆れたように溜息をついた。

「あなたの周りに、さっきの二人がいつもいたから声かけられなかった。お礼も言えなかった。ちょうどいいから今言っ。この前は助けてくれてありがとう」

「いや、ちょっと照れるな・・・」

僕は照れくささから後頭部をかいた。

「じゃあ、私のこと思い出してくれたみたいだし、お礼もしたから本題に戻ろうかしら」

「え？ 本題……ですか」

彼女さんからいやな予感がひしひしと伝わってきた。

「今日一日、あなたは私に絶対服従なんだよね？ じゃあまずは一つ目、水着に着替えてきて」

「……え？」

「遊びに行くのよ。海に」

「それは、ちょっと……」

実は、先ほどから波打ち際で女性の人影がこっちに手招きをしていたのだ。

深夜、砂浜で幽霊を見かけることはなかったが、やはり日中だと活発になるようだ。

今しがた二十歳過ぎの男性がトイレに入っただけだったり、母親とその娘がトイレから出てきたりしていたが、誰一人として女性の影には気づいてないようだった。

それもそのはずだ。見えていないのだから。

見えてない人に霊障が降りかかることは滅多にないが、見えてる人は別だ。

近づくと、何かを訴えてきたり、とり憑いてきたりと、大変な目にあってしまう。

「あ、そっか。もしかして泳げないんだ？」

しばらく黙っていたせいで、神原さんにそういう風に思われてしまったらしい。

「いや、泳げないこともないけど」

余談だが、プールの授業で武から言われたのだが、僕の泳ぎは泳ぐと言うより、浮いて進むと言った方が正しいらしい。それくらいスピードが遅いのだ。

「じゃあ、海が嫌いなの？」

「そういっわけでもないんだけど・・・」

仕方ない。本当のことを言おう。

せつかく僕なんか言い寄ってきてくれてるけど、もう嫌われたっしょうがない。

「見えるんだ」

「・・・見えるって？ 何が？」

怪訝そつに眉を顰^{ひそ}める少女。

「・・・幽霊が」

その瞬間、神原さんの顔が青ざめた。

「え？ ゆづ・・・れい・・・？」

そつ口にしながら一歩、また一歩と後退りする少女。
どつやら神原さんはこの手の話題に弱いようだ。

「……まじ？」

「まじです。今波打ち際の方で女の人が手招いてるし、あっちの砂浜にはよきつと手が不自然に一本生えてるし、あっちには」

と、指差しながら説明していると、彼女は青ざめた顔をしていたが、やがて、何かを振り切るように僕の前から全速力で走り去っていった。

ちょっとやり過ぎた気もするけど、事実を言ったまでだから仕方がない。

これでもう完全に嫌われたらうな。

長嘆息をついて旅館へと帰ろうとしたら、

「や！　また会ったね」

神原さんと入れ違いに現れたのは、深夜の砂浜で出会った少年だった。

冬夜少年は神原さんの走っていった方角を一度見て、にこにこしながら尋ねてきた。

「可愛い女の子が走っていったけど、なんだかふられたように見えたが、君がふったのかい？」

「まさか。僕がそんなにモテるように見える？」

何が癪に障ったのかは自分自身でもわからなかったが、僕はつぶつきらぼつな口調になってしまった。

「ああ。見えるよ」

しかし、彼はそうあっさりと返答をよこした。

「なら君の目は節穴だね」

どうにもイライラが募っていて、早く一人になりたい衝動に駆られた。

「とりあえず、もう旅館に戻るよ」

「え？ 戻るのかい？」

「あまり外に長居したくないんだ」

「なぜ？ せっかくあそびに来たんだろ？」

「そついう気分なんだ」

応酬を繰り返しても埒が明かないと、僕は冬夜少年に背を向けて歩き出していた。

「じゃあ、質問を変えよう。君も見えてるんだろ？ あそこで手招きしてる人が」

背後から唐突に投げ掛けられた、全く予想だにしていなかった問いに、僕は全身が凍りついた。

「ああ。僕にも見えてるさ。あそこにいるのと、あっちにいるの」

僕の返答を待たずに、彼は自分も霊が見えることを明かした。振り返ると、彼は複数の箇所を指差していった。神原さんがいた時に僕が示した場所と、それは同じだった。

「見えてるなら仕方ない。お気の毒だね」

僕は氷づけにされたように動けず絶句していた。

そうか。だからこの少年も夜中に会った時と同じ私服の格好をしていたわけだ。

幽霊が見えてるのでは、水着に着替えて海に入るわけにもいかないのだから。

「君はいつたいー」

「おっと、戻ってきたみたいだね。じゃあ行くよ」

言下に遮られ、自分が去るはずだったのに、冬夜少年が先に去って行ってしまった。

去っていく彼の姿を見届けていると、入れ違いのように駆けてくる足音。

「はぁ・・・はぁ・・・よかった。まだいたんだ」

戻ってきたというのは、神原さんのことだったようだ。
彼女は膝に手をつけて肩で息をしていた。

幽霊が苦手だろっから、さっきの話題でもう戻ってこないと思っ
ていただけに、僕は暫し啞然としていた。

「はぁ・・・はぁ・・・これ！」

呼吸を整えながら僕に差し出してきたもの、

「幽霊がいるっていつてたけど、これ持ってれば大丈夫でしょ？」

彼女の手の中に入ったのは水色の小さなお守りだった。

神原さんは魔除けになると思って持ってきてくれたのだろう。
しかし、このお守りは、

「これ、交通安全て書いてるよ」

「これしか持ってなくて・・・やっぱりダメ？」

「いや、ダメってわけでもないけど」

何かが吹っ切れた心地がした。だから僕は彼女の手からお守りをもらった。

「ありがとう」

「え？」

「幽霊の話で怖がらせたから、てっきり僕のことを嫌って逃げたのかと思って」

「べ、別にそんなことで嫌うほど私は、私は・・・」

最後の方は蚊の鳴くような声だったので、小さすぎて何と言ったのかは聞き取れなかった。

それよりも、どういいうわけか彼女は唐突に顔を赤くして目に角を立てたのである。

「な、なに言わせる！ それよりも、幽霊がいて海で遊べないのにどうしてこんなところに来たのよ？」

「こんなことになるなんて予想してなかった。というより忘れてた」

「間抜けね」

不敵な面持ちでクスクス笑う神原さん。
確かにその通りだから認めざるを得ない。

「ごもつとも。でも、まだ慣れてないんだ。見えるようになったのは半年くらい前からだから」

「え？ そうなの？」

「ああ。それまでは僕はごく平凡に暮らしてたんだよ」

「そうだったんだ」

半年前に何があったのか、経緯を訊かれるかと思っただけ、神原さんは何も尋ねてこなかった。

やはり幽霊が苦手なのだろうから、それが見えるようになるまでかけなんて知りたくはないのだろう。

「じゃあこれからどうすんのよ？」

「残念だけど部屋に戻ってゆっくりするよ」

「そっ？　なら私もそっする」

「どうして？　せっかく来たんだから皆と遊んできなよ」

その瞬間、神原さんにギロツッと睨まれてしまった。

「何言ってるの？　幽霊がいるなんて言われたら海に近づけるわけがないじゃない」

「そ・そっか。ごめん。巻き添えにしちゃって」

「いい。それにあなたは今日1日私の忠実な下部でしょう？　傍にいて仕えてもらうから。約束は果たしてもらわないとね」

「さいですか」

そんなやりとりの末、僕らは旅館へ向けて歩き始めたのだった。

旅館に近づくにつれ、海水浴客が多くなってきた。相変わらずすれ違うのはカップルや家族連ればかりだ。

神原さんは僕のとなりを同じ歩幅で歩いているが、何かの話題で盛り上がっているとわけてもなく、ただ黙々と足を進めていた。こうして歩いているとカップルみたいで、二人並んで歩いているのが自分でも信じられなかった。

澄んだ茶色の瞳を内に含んだ切れ長の目に、時折緩やかに吹くそよ風になびくウェーブの入った茶色の髪、まだまだ成長盛りだと言わんばかりの小柄で華奢な体躯、少し圧しの強い性格だが、隣を歩いている神原さんは美少女そのものだ。

今しがたすれ違った同年齢くらいの男性三人組の視線を集めていたし、学校ではかなりモテるのではないだろうかと思う。

一目でも見てしまうと目が離せなくなりそうな、そんな尊さと麗しさが彼女にはあった。

「なに？」

「いや、べ・別になんでもないです」

だから見とれてしまって、今みたいに虚を衝かれて動揺している自分が恥ずかしくなった。

しかし、僕の胸中などどこ吹く風、隣を歩く彼女は突然口火を切ったのである。

「ねえ？ ちょっと聞きたいんだけど、この辺りで中学生くらいの男の子の幽霊って見たりした？」

「男の子の霊？ いや、見てないけど、なぜ？」

「師走の館」

「え？」

背筋が凍りついて、僕ははたと足を止めてしまった。

またその館の話題か。

ここに来てその館の名前を聞いたのは三度目だ。

神原さんは僕の二歩先で振り返り、不思議そうに僕を見ていた。

「どうかした？」

「いや、何も。神原さんも知ってたのか。よほど有名なんだね」

「私は昨日姉さんから聞いただけ。有名かどうかは知らないわ」

「その男の子が師走の館と関係があつて、この辺りに出没するとか
？」

「そうらしいわね。私が聞いた話では、その男の子は師走の館の住
人らしいんだけど、師走の館の中で男の子の名前を呟くと館から出
られなくなるとか」

「それは物騒な」

「その男の子の名前が『きねらびね』とついで『つて言ひらしいわ』」

「なんだって!?!」

「きゃっ!?!」

「あ、ごめん」

僕は夢中になって驚掴みしていた神原さんの肩から両手を引いた。

まさかあいつが……。

いや、でも昨日といいさっきといい、そんな雰囲気は感じなかったが。

もしかすると同名かもしれないのだ。早合点しない方がいい。

「なに? なんか知ってるの?」

「……いや。ここにきてから同名の少年と何度か会ってさ。幽霊ではなかったけど」

「そうなの? 奇妙な巡り合わせね」

そういえば彼にも霊が見えていたんだ。

もしかすると、彼とは何か縁があつて引き寄せられたのかも
しれない。そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8760x/>

silence mirage ~ 天空の導き人 ~

2012年1月5日01時46分発行